

Bloomsbury の知的貴族たち

村松 加代子

〈はじめに〉

Paris の Montparnasse や New York の Greenwich Village のように、ある地名がたんに地誌上の名称にとどまらず、そこに生きる人々と、その人々によって醸しだされる特有の精神的・文化的雰囲気をも喚起する場合がある。

これから述べる Bloomsbury もまた、そうした精神性を付与された地名、人格化された地名である。これは大ざっぱに言えば、かつてこの地に集った upper-middle-class (上層中流階級) 出身の芸術趣味ゆたかな知的エリートたち、および彼らの築いた知的・精神的風土をさすが、これには往々にして敵意や不信や嫌悪の情がこめられている。なにしろ、「Bloomsbury は英国では、悪口を欲する者にとって、つねに解禁された獲物」¹⁾ でありつづけたのだから。

13 世紀の昔、Blemond 家の「荘園」、すなわち、'burh' があつたことにその名を由来する Bloomsbury は、London の City と Marylebone の間に位置し、北は Euston Road、東は Gray's Inn Road、南は New Oxford Street と High Holborn、西は Tottenham Court Road に囲まれた閑静な middle-class (中産階級) の住宅地にあたる。

20 世紀初頭、ここに high-brow な青年男女が定期的に会合をもつようになり、独自の文化をくりひろげた。やがて Bloomsbury という言葉は、外部の者、とくにジャーナリズムによって、彼らのパーソナリティや生き方にまつわる最大公約数的イメージをさすものとして使われるようになった。それゆえ、Bloomsbury の定義自体一定しておらず、神話と現実の狭間で取り沙汰されてきたというのが現状である。

もともと Bloomsbury はなにか共通の理念や目標をかかげて組織さ

れた会などではなく、友情や愛情によって次第にその輪が広がっていった友人たちの集まりにすぎない。だから、この「考える限り無定形な一群の友人たちの集合体」を論じようなどということ自体、「なかばカメレオンで、なかばヒドラのような怪獣の性格を憶測したり、渦巻の大きさを測定しようとする試み」²⁾以外のなものでもないのだが、その無謀さをあえてかえりみずにひとに食指を動かさせるなにかがここにはあることも事実である。先述したように、これまでにさまざまな人たちが、神話と現実の狭間で一家言を披瀝してきたゆえんでもある。

ここでは、まず Bloomsbury の外枠にしぼって考えてみる——

Bloomsbury 誕生の時期については、1905 年ということがはっきりしているが、その終焉の時期となると、メンバー自身の間でも意見がくいちがっている。これに関しては、Memoir Club の創設時期に目安をおく Quentin Bell の説が最も説得力にとむと思われる。これは、1920 年 3 月、Molly (Mary) MacCarthy が第一次大戦中に散り散りになった Bloomsbury の仲間を再び集めようと意図して提唱した会(一説には、身近な問題に心乱されて楽な本一冊書けないでいる Desmond MacCarthy を励まそうとして Virginia Woolf が創設したということになっている)で、その趣向は、定期的に会合をもち、互いに回想録を読み合うことにあった。Clive Bell も同じ頃に、‘a great historical group portrait’ (‘偉大な歴史的グループの肖像画’)を描くというアイデアを仲間にもちかけている。

回想録といい、肖像画のアイデアといい、さらにはこの頃 Virginia が読みあげたペーパーの中で ‘Old Bloomsbury’ なる言葉を使い出しているという事実といい、彼らの間に、Bloomsbury の少なくとも本質的な時期は終焉したのだという共通した感慨があったのではないだろうか。‘Memoir Club のメンバーは、‘Old Bloomsbury’ のメンバーと完全に符合する」という Leonard Woolf の言葉はこれを裏づけるものとして心強いが、ただ、私としては、彼の掲げるリストのうち、E.M. Forster だけは除外するのが適切であり、一方、たとえ 1 年後には世を去ったとしても、Bloomsbury の発案者たる Thoby Stephen を含めぬのは不当であると考えている。Bloomsbury は第一次大戦後、第二世代ともいうべき若いメンバーを数多く吸収していくのだが、本稿ではその最も魅力的で独創的な時期における ‘Old Bloomsbury’ だけに的をしぼった。ここにさきざ

きの論議の便宜をはかって、13人のメンバーの名前を記しておく——

* 印 'the Society' のメンバー

† 印 'Midnight Society' のメンバー

Virginia Woolf (née Stephen 1882-1941) 小説家・評論家

* Leonard Woolf (1880-1969) 政治思想家・小説家

Vanessa Bell (née Stephen 1879-1961) 画家

† Clive Bell (1881-1964) 評論家

† Thoby Stephen (1880-1902)

Adrian Stephen (1883-1948) 精神分析学者

Mary (Molly) MacCarthy (née Warre-Cornish (1882-1953)
小説家

* Desmond MacCarthy (1877-1952) 評論家

* Roger Fry (1866-1934) 評論家・画家

*† Lytton Strachey (1880-1932) 伝記作者

* Maynard Keynes (1883-1946) 経済学者・大蔵省勤務

*† Saxon Sydney-Turner (1880-1962) 大蔵省勤務

Duncan Grant (1885-1978) 画家

〈'Clapham Sect' と Cambridge〉

Bloomsbury の精神風土に似たものを辿っていくと、今からおよそ1世紀前に遡る。19世紀半ば、London の南方、Clapham という地区に一群の友人がいた。「彼らはある種の上品な信仰心と、かなりの富をもつ裕福で有徳の人々であり、異教徒の啓蒙と奴隷制の廃止に並々ならぬ関心を寄せていた」³⁾。これがいわゆる 'Clapham Sect' ('クラパム派') ないしは 'Saints' ('聖人たち') と呼ばれる人々である。

Virginia Woolf の生まれ育った Stephen 家も Clapham 派に属していた。この派には、非順応的な、自由主義的立場にたつ富裕な家族のネットワークがあって、これらの家族が19世紀後半思想界をリードする。Stephen 家のほかには、Cadbury, Rowntree, Fry, Gaskell, Wedgewood, Darwin, Trevelyan, Huxley, Martineau, Strachey, Vaughan-

Williams, MacCaulay, Arnold というような錚々たる家族がこれに名を連ねている。

彼らの血統結婚からさらに大きないとこのネットワークが生まれた。これらの拡大化した一派は、古い貴族制度に批判的で、洗練された教養をなによりも尊び、既存の価値観をその動機にまで遡って再評価する必要を感じていた。また、彼らは自らに備わる特権を自覚していると同時に、それを有効に使いたいと願ってもいた。

1871年以降、これらの家族は彼らの息子を大学に送るようになったが、'Oxford Movement' に汚されていないという理由で、そろって Cambridge を選んだ。Oxford が 'graces' (「恩寵」) を中心に据えていたのにたいし、Cambridge には政治への関心と、'cold reason' (「冷徹な理性」) の伝統があった。「Cambridge は Oxford とはちがって上流社会ではなく、ピューリタンの、知的な中流階級の学生たちの大学であり、一方、Oxford の学生たちはみな首相や大使となり、裕福であった」⁴⁾。Matthew Arnold を Oxford との関わりなしには考えられぬように、Virginia の父 Leslie Stephen を Cambridge と切り離して考えるのもむずかしい。また、「Oxford の男たちが、世界をわがものとしたかのようにふるまっているのにたいし、Cambridge の男たちは、誰が世界をわがものとしようが、知ったことかというような顔をしている」⁵⁾ というのもこの頃に言いだされた言葉であった。

Raymond Mortimer によれば、Stephen 家と Strachey 家の両家は、英国の学者の家柄のほぼ半分と親戚関係にあるが、Stephen 家は代々、知的な職業のうちでも法曹界の仕事や文筆業にたずさわってきた。Leslie Stephen もまた、fellow の地位を得て、Cambridge にとどまったが、やがて神学上の命題、とくに「三十九箇条」に対する疑惑がつのり、イングランド教会の大学支配にも批判的になって、自らの良心に従って大学の職を辞し、文筆で生計をたてるようになった。

娘の Virginia は父 Leslie にたいし、こもごも抱く愛憎の感情に苦しんだ。ひとつは、Victoria 朝の不合理な因襲的観念に 'No' をつきつける彼の正直で大胆な思考にたいする感嘆の念であり、もうひとつは、同じ Victoria 朝の家父長制に甘んじている彼のうちなる暴君にたいする憎悪の念であった。

父亡きあと Virginia はこう回想している——

父は家庭生活ではある種の行儀作法——格式とさえ呼べるものを期待しました。けれども、自分でものを考え、自分の目標に従う権利を自由と呼ぶならば、そういう自由を父ほど徹底して尊重し、実際に主張した人はありません。息子たちは陸海軍への途は別として、その他の職業なら何でも選べました。娘たちにも、女子の高等教育には殆んど顧慮を払わなかったけれども、同じような自由を与えてくれました⁶⁾。

だが、娘たちの天分をいち早く認め、それぞれに文学と絵画の修業の便宜を計ってやった Leslie も、こと家庭内の人間関係、とくに男女関係においては、'cold reason' の導くところとはほど遠く、不合理な感情に翻弄される者であった——

彼は妻を…女神のような理想像に変えようとしたが、家庭では、自分の思うようになり、感情の危機にあつては彼を支え、彼の人生の些事一切を処理し、しかるのちに、彼女が掌握している家政のことについて彼の批判を甘んじて受ける女として取り扱った。…彼はいつも彼女の感情を踏みにじり、自分を慰めてくれた彼女の心を傷つけ、自らの愚かさを半ば意識しながらも、それを抑制できなかつたのである⁷⁾。

父をめぐる Virginia の内心の葛藤は、彼女が人間的・作家的に成熟するにつれて、社会的考察へと昇華されていく。つまり、父の不合理な感情は彼個人の残酷さではなく、社会の産物なのではあるまいか。彼女の親戚の男性たちは大学を卒えると、その大半が学長や裁判官などのエリート職に就いていた。彼女は、家父長制という機械のカラクリに思いをこらして、つぎのようにユーモラスに描いている——

例の機械にポンと入れられると、60歳かそこらで、校長や将軍や首相や裁判官となって、先端から出てくる⁸⁾。

のちに Bloomsbury は、ひと世代前の知的な人たちが神や世論に対して懐疑的姿勢で臨み、それに敢然と異を唱えたその勇気を称える一方で、先の Leslie Stephen の例に象徴される自己矛盾や自己満足の側面には鋭い批判の眼を向けることになるのだが、これははまだ少し先のことである。

〈'the Society' と G.E.Moore〉

Quaker 教徒の middle-class の家に生まれ育った G.E.Moore (1873—1958) が Cambridge の Trinity College に進んだのは 1891 年のことであった。彼はまもなく 'the Society of the Cambridge Apostles' (「ケンブリッジ使徒会」) という学生サークルに迎えられた。'the Cambridge Converzatione Society' (「ケンブリッジ懇話会」) という正式名をもつこの会は、のちにジブラルタル主教となる George Tomlinson を中心に 12 人の学生によって創られた討論会で、「人生の最高のものは会話であり、その最大の成果は信頼である」という Ralph Waldo Emerson の言葉を拠り所としていた。また、1820 年代初めには、自分たちを「紀元 2 世紀の 'Apostolic Fathers' (使徒後教父たち) の神学擁護者であり、正統な後継者であると考えていた」⁹⁾。この会のメンバーシップは終身で学部学生ばかりでなく、かつて会員であった大学院生や don(教員) も加わっていた。

メンバーの選考は、新入生の中から特に学業のできる者、特待生試験に見事な論文を書いた者数名を選びだし、さらに入学後の 1 年間、メンバーたちがさりげなく散歩に連れだしたり、ティに招いたりしてそれとなく接触しながら審査した。だから、候補者自身、入会を認められ、それを告げられるまでは、自分が候補にあがっていることを知らなかった。また、会員になってからも、会のことは一言たりとも外部に漏らしてはいけないことになっていた。1936 年、使徒会員に推された Michael Straight は、King's College の Maynard Keynes の部屋で行われた最初の会合について、つぎのように記している——

私は右手を挙げて恐ろしい宣誓を繰返した。会員でない者に会のことを一言でも漏らしたなら、その後永久に、魂が耐えがたい苦痛

に悶えることになるという誓いであった。…「いいかい」と彼 (Sheppard) が説明してくれた、「この誓いは、会員が使徒らしくない人間と口をきくなんてありえないと思われていた時代につくられたんだ」。使徒らしい、とはどういう意味かと私は訊ねた。彼は子供っぽく得たりとばかりに笑って言った、「ひじょうに頭が良くて、とびきりすてきでなくちゃならないのさ」¹⁰⁾。

会合は毎週土曜の夜に開かれた。彼らの間には、彼らにしかわからぬ陰語があった。‘whale’ (塩漬のアンチョビをのせたトースト) が供され、‘moderator’ (「論文を読む会員」) が暖炉の前の敷物の前に立ち、15分から時には2時間に及ぶ論文を発表する。その後討論に入るが、出席者は全員発言しなければならない。聴き手と‘moderator’の間で質疑応答がつづき、夜の更ける頃に結論が起草され、賛否が票決によってなされる。最後に、次週の‘moderator’が籤で決められ、次の討論の題目が決められる。これは4つの題目から選ばれるが、そのうち1題はユーモラスなものとなっている。次回の論題が決まったところで散会となる。大抵は文学的・哲学的な主題であった。

1855年にメンバーとなった Goldsworthy Lowes Dickinson は、‘the Society’の雰囲気をつぎのように伝えている――

(「使徒会」は) 入会した年、というよりその1、2年後からだ、長年にわたって私の生活の重要な部分を占めるようになった……私たちは、現在もそうであるように、土曜の夜に集まった。論文が読まれ、籤を引いて順番に発言した……私が感じたことの真髄を伝えることは不可能である。若者が知的にも精神的にも成長しつつあるとき、また、思索が情熱であり、討論が愛情によって深遠なものとなるとき、その魔法の空気を吸っている人以外には信じられない数々のことが起きる¹¹⁾。

1883年、Cambridgeの道徳哲学教授となった Henry Sidgwick は Dickinson よりもいっそう具体的に‘the Society’の雰囲気を伝えている

親しい友人のグループが、絶対的献身と遠慮のなさをもって真理を追求する精神がそれであったと記すほかはない。彼らはあくまで率直であり、ユーモアに富む皮肉や戯れの揶揄に耽ったが、そのときも互いに尊敬心を失うことはなかった。ひとりが論じているときは、相手は彼から学ぼうとし、彼の見ているものを見ようと努めた。絶対的な率直さ公平さ、これがこの会の伝統が命ずる唯一の義務であった¹²⁾。

そして、この精神こそが、やがて何人かのメンバーによって Cambridge から Bloomsbury に移植され、さらに独特の精神文化へと変容をとげるのである。

Sidgwick はまた、会員相互の絆に触れて、「the Society」の人々の結びつきは、私が生涯で体験し、見聞きたいかなるグループの結びつきよりも、はるかに強固で永続的なものであったと感じているが、これは恐らく、使徒たちの全部とはいわないまでも、大多数に共通した感情ではあるまいか¹³⁾と述べている。実際、「the Society」のメンバーがこの会に示す愛情と、その生涯に及ぶ影響力への言及は、全員に一致している。彼らにとって、「the Society」は大学生活の中心であった。学期中にはほとんど行動を共にしたばかりか年に1回のロンドンでのディナーがあり、休暇中は休暇中で、互いの家を訪ね合って過ごしたのであった。

ところで、Dickinson 言うところの魔法のような雰囲気、昂揚した気分は、「the Society」にとどまらず、この頃の Cambridge 全体に及んでいたようである。Bloomsbury の仲間が在籍していた頃の Cambridge は、折しも、哲学方面に Ellis McTaggart や G.L. Dickinson, George Moore や Bertrand Russell などの傑物を次々と輩出し、その全盛期にあった。Bloomsbury の仲間より少々先輩格にあたる E. M. Forster は、当時の Cambridge をこう回想している――

ケンブリッジは魔法にかかったようだった。肉体と精神、理性と感情、仕事と遊び、建築物と風景、笑いと言葉、人生と芸術――他のところでなら対照をなすこれらふたつのものが、ケンブリッジではひとつに融け合っていた。ひとつと書物が互いを強化し、思索は情熱となり、討論は愛情によって深められた¹⁴⁾。

‘the Society’には、1830年代より同性愛の底流があった。1880年代に入るとプラトニックなものから実践的なものへと変わった。女は肉体的にも精神的にも劣るので、男の男に寄せる愛情のほうが女にたいするそれよりも偉大だと考えられていて、彼らの間に‘higher sodomy’(「高級な男色」という秘密の言葉さえうまれた。使徒間の同性愛は20世紀初頭にその頂点に達し、「女好きの者でさえ、まともと思われたくないばかりに、男色のふりをする」とDuncan Grantが冗談口を叩くほどであった。

Lytton stracheyはたまたま‘the society’の書記であったので、その特権を活かして、‘Ark’(過去の議事録や歴代の会員各簿などすべての記録文書が保存されているトランク)の中の書類を漁って、先輩の多くが精神的、肉体的同性愛者であることをつきとめた。プラトニック派と実践派に分類すれば、さしずめつぎのようになる——

Lytton StracheyとMaynard Keynesは^{ブラクティカル・ホモセクシャル}実践的同性愛者、Leonard Woolf, Roger Fry, Desmond MacCarthyは^{ヘテロセクシャル}異性愛者、Saxon Sydney-Turnerは、他のことについてと同様、謎である。「Saxonさんは独りではなにもお決めになれないのよ。ご自分の召しあがりたいたいものです、はっきりなさらないの」とVirginia Woolfは姉に宛てた手紙(1909年8月8日付)に記している。

だが、同性愛は、彼らの変則的性向であると同時に、それには一段と深い意味もこめられていた。それは、教会と、その教義の根底をなす「原罪」という考え方へのこれみよがしの反逆でもあったのである。

もし、あるグループがあって、それが自己充足し、活気づいていたり、成功を誇っている場合、世のひとは、「なんと鼻もちならぬ連中だろう」と一括りにこきおろすことによって、わが心の羨望と敵意の葛藤をとり沈めようとする。自分たちが理解できぬものや介入する余地のないものに対しては、知的評価よりも人間的評価や心理的評価が先行することが往々にしてあるが、Bloomsburyの場合も例外ではなかった。Fabian協会の主宰者Beatrice Webbはコトニー卿夫人に宛ててこう書いている

Bertie (=Bertrand Russell)がCambridgeに進んだのはよくあ

りません。そこでは Lowes Dickinson を頭とする悪い連中がいて、性の問題について一種の無秩序な考えをよしとしています。若いフェビアン協会員にそれが悪影響を及ぼしていることにはずっと前から気がついていました。その知的スターは *Principia Ethica* (『倫理学原理』) を著わした George Moore で、彼らは皆、口々に 'The Truth' と称してこの本を話題にしています¹⁵⁾。

1850年代に秘密主義が一段と色濃くなったのは、教会の支配から大学を守り、これ以上犠牲者を出すまいという姿勢によると同時に、この同性愛の問題とも無関係ではなかったであろう。Eton の教師で、「生徒たちに余りにも個人的な関心をもちすぎた」がどで誠になった Oscar Browning をはじめとして、すでに何人もの犠牲者がでていた。

脱線になるが、Oscar Browning 氏は「使徒たちの間の同性愛者から成る閉鎖社会という問題を追及したのみならず、労働者階級に対して父性的関心をもつという仮面の下に行きずりの水夫や労働者たちを Kings' College の自室へ連れこんだ。"Hello, sailor!" という呼びかけは彼から始まったといわれているし、海軍の水兵部屋の用語で、同性愛者のことを 'brown hatter' というのは、もともとは 'Browning hatter' であった¹⁶⁾ という。

だが、厄介なのは、この会が世間からこうした数々の響感を買いながらも、大西洋の両側に無視しえぬ影響を及ぼしてきたという厳然たる事実であろう。

170年以上にわたる歴史と、何百人もの会員を擁しながら、'the Society' は今日まで連綿とつづいている。この間に、芸術、文学、哲学、政治、経済、マスコミ等々、各界に傑出した人物—Alfred Tennyson、B. Russell、Ludwig Wittgenstein、などを輩出しつづけてきた。1979年から82年にかけて、数人の会員がソ連のスパイであったことが明らかになるに出て、スキャンダルとしてニュースに取りあげられて以来、急速に世の関心をひき、一部の人々の調査意欲をかきたてて、今日に至っている。

'the Society' には、そのときどきに、会を活性化し、会の精神の方向づけを行ったリーダーともいべき人物がいた。19世紀初頭には、キリスト教社会主義の父と呼ばれた John F. Maurice がそれにあたり、つい

で Stuart Mill の信奉者で実験哲学の先駆者 Henry Sidgwick が、さらには、Ellis McTaggart がそれを受け継ぎ、Bloomsbury の仲間が籍をおいていた頃には、哲学教授の George E. Moore がその影響力をほしいままにしていた。彼が 'the Society' のメンバーたちに与えたインパクトを Maynard Keynes がつぎのように伝えている——

1902 年のミカエル祭の休暇に私は Cambridge に入学した。一年生の終り頃、Moore の *Principia Ethica* が世に出た。今の若い人たちがこの本を読んだという話は聞かないが、私たちに及ぼしたこの本の影響力と、その出版前後にさかんになされた議論とは実に決定的に重要なものであって、たぶん、その影響力は現在の私たちにも及んでいると思う。私たちは信念が行動を左右する年頃だった。このことは中年になると忘れてしまいがちの若者の特徴なのだが。当時形成されたものの感じ方の習性が、今でもそれとはっきりわかるほど持続している。このものの感じ方こそは、私たちのほとんど全員に影響し、私たちのクラブを、外の世界と全く違うものにしていくものなのだ。Moore その人は宗教上の形式にやかましいピューリタンであり、Strachey は…Voltaire 主義、Woolf はユダヤの律法学者、私自身は非国教徒、Sheppard は国教徒で(現にそうなったように)教会の牧師、Clive は賑やかで愛想のいい男、Sydney-Turner は静寂主義者、Hawtrey は教条主義者、といった具合に、各人はみな個々に違った人物でありながら、このクラブがひとつにまとまっていたのは、じつにこの共通したものの感じ方の習性によるものだった¹⁷⁾。

.....
実際、これはそのとおりであった。大方の Bloomsberries が絵画や文学といった自治領の住人だったのでたいし、Maynard Keynes だけは、アトリー政府の指導的人物であり顧問だったので、世間との交渉を最も多くもつ者であった。にもかかわらず、彼の友人 Clive Bell は、そうした経歴からは想像しがたい Maynard の姿を伝えている——

ふたつの頑丈な錨が Maynard をしっかりと岸につないでいた—
すなわち、彼の昔からの友人たちと Cambridge がそれである。たと

え首相や *The Times* から賞賛されようとも、彼は Lytton や Duncan、Virginia や Vanessa らがこの絶賛にくみしないのではないかと不安であった。公的な賛辞はなにか恥ずべきものに思われた。爵位の授与が告げられた後、はじめて夫人を伴い Charleston (Bell 夫妻の家)を訪れたときの彼はそれこそおどおどしていた。「ほくたち、笑われに来たよ」と彼は言った。…それに Cambridge はこれをどう考えるかしら？ Maynard は祖国を熱狂的に愛していたが、大英帝国の財政を救うよりは、King's College の財政を改善することにはるかに骨折ったと私は信じている¹⁸⁾。

1903年、George Moore の *Principia Ethica* が出版されると、これはたちまち、'the Society' のバイブルとなった。彼はこれまでの倫理学の方法論を批判し、彼のいわゆる'scientific ethics'をうちだした。はじめの4章を従来の倫理学の誤った学説と彼の倫理的推論の提起にあて、終り2章を行為に関する倫理とその理想にあてている。

彼の哲学が'the Society'の仲間にとどのように受容されたかについて、Keynes がつぎのように述べている——

言うならば、私たちは Moore の宗教を受けいれて、彼の道徳は棄てたのでした。実際、私たちの理解によれば、Moore の宗教の最大の利点のひとつは、それが道徳を不要にしてくれたことでした。

Moore の道徳とは、「正しい行為とは何か」についての理論であり、彼の宗教とは、「ひとの交わりと美の享受には、想像しうるかぎりの最高にして最大の善が内包されており」、これこそが、「徳の存在理由であり…かつ、人間行為の理性的究極目標となり、また、社会進歩の唯一の規準たりうるものである」¹⁹⁾ というヒューマンイズムの宗教であった。

'the Society'の仲間にとって、Moore の理論は、彼らが漠然と感じていたことを明文化してくれたように思われた。それと同時に、彼が議論をすすめていく推論の方法もまた、鮮烈な衝撃であった。彼の推論の方法は、つぎの3点を要としている。すなわち、(1)命題に答える前に、問題の真の所在をつきとめ、問題点を明らかにすること、(2)いかに権威ある学説や教条であろうと、それが真理であると論証できないものは、こ

れを拒否すること、(3)推論のプロセスを簡明直截に述べること、である。

議論の際、「で、君の訊きたいことは、正確にはどういうことかね？」と逆に訊ねられることはしょっちゅうであった。これは、眉を吊りあげ、眼を大きく見開いて口をつき出し、髪の毛がうちふるえるほどに激しく首を振りながら‘No’と答える彼のジェスチャーと共に、相手に強烈な印象をのこした。今や、Mooreの哲学は、Victoria朝の物質主義的価値観や俗物の武器となり下った道徳を一掃して、代りに理に叶った理想的な哲学をうちたててくれたかに思われた。Lyttonは「理性の時代が到来した！」と叫び、Keynesも、「それはワクワクし、胸躍る出来事であり、ルネサンスのはじまりであった。…私たちは新しい宗教の先駆者だった」と記している。同じKeynesによる次の言葉は、彼らの陶酔的な気負いと一途な実践をよく示している。「このようにして、我々はプラトンの善それ自体への没入と、聖トマスを凌ぐスコラ哲学、それに虚栄の市の快樂と成功からのカルヴィン主義的離脱を身につけ、(若き)ヴェルテルの悲しみにさいなまれつつ成長した」。²⁰⁾

1889年秋、CambridgeのTrinity Collegeで一緒だったSaxon Sydney-Turner, Leonard Woolf, Lytton Strachey, Thoby Stephen, Clive Bellが‘Midnight Society’（「深夜会」）を創始し、のちに、E.M. Forster, Desmond MacCarthy, Maynard Keynesを招き入れた。この会はさしずめ、‘the Society’の内輪の会といった体裁で、ウィスキーかパンチ、それにビーフ・ステーキ・パイなどが供され、詩や劇の朗読をし合った。同じ土曜の‘the Society’のあとに始められ、深夜に及んだことからこの名称がつけられた。

それから数年後、Cambridgeを卒えると仲間の何人かがLondonに出てきて、Bloomsburyのあちこちのsquareに居を構え、再び定期的に集まるようになった。ただ、当時と著しく異なったのは、そこに2人の女性が参加していて、その大胆な思考と才気煥発、辛辣な発言で彼らを驚かせたことであった。というより、会の発案者たるThoby Stephenが自宅を開放したために、彼の姉妹のVanessaとVirginiaがおのずと加わるようになり、やがて会の中心的存在となったのであった。また、Cambridge時代の仲間以外にも新たにメンバーが加わった。

1905年3月6日に第1回目の会合がもたれたこの‘Thursday Evenings’こそは、のちに‘Bloomsbury’として知られることになるのである。それはまさに、「高踏的で審美主義的な Cambridge に、批評家がそれ以来呼びならわしてきた London の ‘intellectual aristocracy’ (‘知的貴族社会’) が接木された」²¹⁾ 歴史的瞬間であり、痛烈な批評家 Frank Swinnerton の言を借りれば、「Cambridge の ‘exiles’ (‘亡命者たち’) の ‘home’ (‘精神療養所’) ²²⁾ が呱呱の声をあげた瞬間ということになる。

いずれにせよ、彼らはいま 20 世紀の「ルネサンス」を一身になう者の自負と使命感にもえて意気揚々といったところであった。第一次大戦下、良心的徴兵忌避を願いで、周囲の者から、「高貴なる義務」^{ノブリス・オブリージ}をのがれる者として非難されたとき、彼らのひとりが答えたせりふはよく知られている——「奥様、わたしが、皆様がそれを守ろうとして戦っておいでの文明なのでございます」。

そして実際、彼らは後年、それぞれの分野に優れた業績をのこして、これを立証することになるのである。

〈Bloomsbury の歩み〉

9 年前に母 Julia を喪い、今度はまた父 Leslie をも喪った Stephen 家の 4 人の遺児が、引越先に Bloomsbury を選んだのは、なによりも経済的理由からであった。高級住宅地 Kensington に比べて、こちらははるかに家賃が安かったのである。しかも、近くには London 大学や大英博物館があり、知的雰囲気は漂っていたし、近隣の住人たちも、Kensington の上層中流階級には及ばぬまでも、中流階級以下ということはなかった。彼らの移り住んだ Gordon Square 46 番の家のある棟は飾らぬ気品があり、すぐ前に美しい共有の庭園もあった。そこで、ひとりが移り住むと、「来ないかい？ 空いている部屋があるよ」ということになり、仲間のすまいが「多か少なかれ 1 晩にして、マッシュルームのように」²³⁾ 点々と広がっていったのであった。

彼らの新しい環境について Virginia は、「この雰囲気には、私たち旧家の古いしきたりに反するような何か…もし、母が生きていれば、きっと娘たちのすまいにはふさわしくないと感じて反対したかもしれないような何かがある」²⁴⁾ と記している。そして、この「何か」こそが、社会的

に身を落とした筈の Virginia をして、「世界で最も美しく、最も刺激的で、最もロマンティックなところ」²⁵⁾と言わしめたのであった。

深紅色の薄暗い、Hyde Park Gate のあとで、光と大気はひとつの啓示であった…ここでは Vanessa と私にそれぞれ居間があった。2倍も広い客間もあれば、1階には書斎もあった…私たちは実験と改革に夢中であった…絵を描き、文章を書き、朝9時のティの代りに、夕食後にコーヒーを飲もうとしていた²⁶⁾。

姉妹にとっては、上流階級の不毛な社交や、ややこしい慣習からの解放ばしき解放であり、限りなき未来の可能性を望見させるこの新生活も、Thoby にはそれほど有頂天になれるものではなかった。Cambridge での日々と、そこで与えられた知識、交わされた愛情、豊かにされた知性が忘れられなかったのである。彼は、かつての仲間が近隣に移り住むと、毎週木曜の夕方、自宅を開放することを宣言した。1905年3月16日に第1回目の会合がもたれ、5月末には、総勢9人の青年がやってきて、深夜の1時まで談論していった。

Cambridge の同性同士の遠慮のない議論に慣れていた男性たちは、Thoby の応接間にふたりの女性の姿を見いだし、いささかの戸惑いを覚えたにちがいない。「美」や「善」や「真実」といった抽象的で哲学的な話題が選ばれ、真面目に議論された。かつて Virginia は Cambridge の兄にこう書き送ったことがある—「あなたが毎晩、暖炉の傍でパイプをくゆらせながら Strachey たちとお喋りしながら得るものを、私は独りぼっちで辛い思いをしながら読書によって得なければなりません…話し合いほど勉強になるものはないと思います」。

だから、姉妹たちが兄の Thoby から常々聞かされていた彼の伝説的な友人たち—「詩人の Shelley とスポーツ好きの田舎の大地主をつきまぜたような」Clive Bell や、「異国的な雰囲気なたたえ、ヒョロ長く、Thoby の腕くらいの腿をした」Lytton Strachey、あるいは、「人間嫌いのユダヤ人」で、「文明に拳を振りたて、まもなく熱帯地方へと姿を消そうとしている」Leonard Woolf や、「ギリシャ文学を全部誦んじていて、夜中、ひとの窓の明かりを見つけると蛾のようにコツコツ叩いて入ってきて、夜中の3時頃やっとうと口をききだす」という Sydney Saxon-Turner

など²⁷⁾——を目のあたりにして、自らも討論に加わったときには、ちょうど Cambridge に入りたての学生たちが覚えたであろうのと同じ興奮にとらえられたにちがいない。

のちに 'Memoir Club' で読みあげたペーパーの中で、Virginia はこう回想している——

議論が私の目の届かない彼方に舞いあがってからずいぶん経ったころ、議論を委ねられた人たちが、小石をひとつ、またひとつと注意深く、正確に積みあげていくのを、私は驚嘆して見守っていました…何か奇跡的なことが空中で起こっているのがチラリと見えましたが…しまい、髪をくしゃくしゃにかき乱しながら彼 (= Saxon) が、非常に簡潔に要約してピシリとケリをつけるのでした。目を見張るような大建造物が完成し、ひとは何かとても重要なことが起きたと感じながら、よろよろとベッドにもぐりこむのでした…美が絵画の一部であることが——それともそうでないことが、だったかしら——立証されたのでした²⁸⁾。

Virginia と Vanessa に精神の自由の尊さを説いたのは父であったが、彼女たちが実際にそれを手に入れるには、彼の死をまたねばならなかったことは皮肉な話であった。

翌年、Vasessa が Clive Bell から求婚されるという出来事がおこった。それを聞いた弟 Thoby は、「これが 'Thursday Evenings' のいちばんいけないことなんだ！」と慨嘆した。同年、彼が急死すると、その2日後に Vanessa は躊躇していた Clive との結婚に踏みきったが、Virginia は、これをもって Bloomsbury の第1章は幕を閉じたと記している。今は Bell 夫妻の家となった Gordon Square の家に、再びダンスやディナーといった社交の風、世俗の風が吹きこんできて、それまでの Bloomsbury の僧院風の雰囲気を一変させてしまったからである。

Virginia と弟 Adrian は、姉夫妻のところからさほど遠くない Fitzroy Square 29 番に移り住み、'Thursday Evenings' の会合には、2軒の家が交互に使われることとなった。

この頃、Virginia は、彼女がこれまで賛嘆してやまなかった Bloomsbury の抽象的で単純明快な雰囲気、じつは男性たちの世事への無関心や、知性偏重の傾向によるものというよりも、その何人かが男性者であるという事実によるものであることに気づく。「人生の簡略化」と彼女が称えたものも、ひとえに彼らが隠微な男女間のマナーや演出に興味を覚えなかったからにほかならない。男性者の社会は、とくに女性にとっては、単純で正直そのものであり、ある意味で寛げるなどの利点があることを認めながらも、Virginia は、そこに不毛さ、退屈さを覚えずにはいられない——

男性者と一緒だと、乳母の言うように、自分をひきたたせるわけにはいかない。何かしらがいつも抑えこまれ、押しえつけられている感じがする。だが、この何かこそは、交接や恋愛とは限らず、人生の大いなる喜びのひとつであり、不可欠のものひとつなのだ…このようなとき、ひとはソーダ水かシャンペンのように飲ばしい沸騰性の飲料となって、そこから虹のように七色に彩られた世界をみるのである²⁹⁾。

彼女が単一の性に伴う退屈で不毛な感じを身をもって体験したことはじつに重要である。彼女が後年ある評論の中で両性具有論を展開し、多くの小説の中で複雑で興味深い人物たちを次々とうみ出したきっかけがこのときの感慨にあることは十分考えられるからである。彼女の *Orlando* という作品は、同一人物の中に男女両性の資質が混在しているという認識に立って書かれた自由奔放なファンタジーである。人生の途上ではからずも男性から女性へと転身し、いまや男女両性の社会的条件や精神状態を識りつくしたヒーロー／ヒロインがやはり両性具有者の男性と結婚し、一子をもうけ、また長年あたためてきた一篇の詩を完成するというストーリーなのだが、Virginia の言わんとするところはこうである——つまり、男性的要素と女性的要素を合わせもつ精神こそは共鳴をおこし、創造をよくなしうるのであって、およそ傑作と呼ばれる芸術作品は、それが書かれるに先だって、作家の精神の中で男女両性の結婚がとりおこなわれるはずである。ふつうの人の場合はこれを結婚生活を通して会得する。彼女の *To the Lighthouse* という作品に登場する若い女流

画家 Lily が滞在先の女主人から、結婚をしない女性は人生の最上のものをとり逃していると言われ、それなら自分はそうした宇宙の法則とやらの例外だと内心抗議の声をあげるのも、こうした作者の認識が背後にあってのことである。Lily は、恋には百千の形態がある、ものの元素を選びだし、それらを集めて、現実生活にあっては不可能な完全さをこれに与え、凝縮された球状のものひとつを造りあげるそうした天分をもつ恋人があってもよいと考えるのである。

さて、話を元に戻すとして、Virginia の言う Bloomsbury の第 2 章は、つぎの出来事を転回点としている。それはある気持のよい春の夜、Clive がいつ入ってくるかも知れぬ気配の中で、Vanessa が坐って縫い物をし、Virginia が夢中で喋っているときに起こった――

突然ドアが開いて、Lytton Strachey 氏のひよろ長い不吉な姿が敷居のところ立っていました。彼は Vanessa の白いドレスのしみを指さして、「精液かい？」と訊ねました。ほんとうにそんなことを口にするなんてありえるかしら、と私は思い、すると、皆で思わずふきだしていました。そのたったひとつことによって、沈黙の障壁と遠慮がちの気分がごとく粉碎されたのです。私たちは、聖なる液体の洪水に呑みこまれていました³⁰⁾。

今や、彼らの間で口にしてはならないこと、行なってはならないことは何ひとつ無くなった。「私の思うに、これは文明の一大進歩です」³¹⁾と Virginia は記している。「Bloomsbury の仲間はその美を愛し、会話に大きな価値を認めていたので、Bloomsbury では会話はひとつの芸術であり、おそらく、Dr Johnson の時代以来、これほど会話が重要視されたことはなかったであろう」³²⁾。これまで彼女を嘆かせた退屈で不毛な雰囲気は一変して、男女の「不条理で歓ばしい沸騰性」の交感以上の世界一性別の垣根がとり払われ、いかなるヴァリエーションも可能な世界一がここに始まったのであった。

たしかに、Rantavaara の言うように、もし Virginia と Vanessa の姉妹がいて家庭的な雰囲気を提供しなかったならば、頭脳の肥大化した青年たちから成るこの集まりは、彼らが Cambridge という温室から俗世

の波風の中に投げこまれていくらも経たぬうちに、離散していたかも知れない。

また、彼女たちのほうでも、そのお返しとして、本来の境遇からは想像できなかつたような生活——同じような知的欲求と人生態度をもつ仲間からの刺激を糧としつつ、自らの芸術的精進にいそむむという生活をわがものとしえたのであった。

たとえ付録という形でにせよ、もしも Bloomsbury に第3章をもうけるとしたら、それは Ottoline Morrell に捧げられるべきだ、と Virginia は記している。そして、これは Lytton Strachey の次の作品にうってつけの主題ではないか、とも提案している。

Virginia と Vanessa が Bloomsbury の核心をなしていた同じその頃、そこからほど遠くない Bedford Square の豪華な邸宅で Ottoline は彼女のサロンをとりしきっていた。彼女には、貴族としての威厳ある物腰に加えて、ロマンティックでメランコリックな雰囲気、幻滅の風情があった。

Virginia は彼女のことを「自分の階級に満足できなくなり、芸術家や作家の間に自分の求めるものを見出そうとしている偉大な女性」と描写し、つぎのようにつけている——

彼女はそういうわけで、あたかも彼らが神々しい靈感を受けた者たちでもあるかのように、決然とした様子で彼らに近づいていく。また、彼らのほうでは、彼女が自分の世界を抜けだして、けして根づきようのない別世界へと入っていくのを、まるで亡霊でも見るように見ている³³⁾。

Ottoline は人集めの天才で、彼女のサロンには、彼女みずから憧憬してやまぬ芸術家ばかりか、この世の権勢を一身に集めた人々の姿も見られた。「黒い衿巻きを巻き、ヴェルヴェットのコートに身を包んだたいそう不吉な感じの」Augustus John やバッキンガム宮殿への途次立ち寄る「金のレースとメダルづくめのたいそう赭ら顔の」Sir Winston Churchill、「つぎつぎと警句をとぼしている」Raymond Asquithなどはその常連であった。Ottoline が恋しているという噂の Gilbert Cannan や、そ

の Ottoline を恋しているという噂の Bertrand Russell の姿が見られたし、何よりも Ottoline 自身がいた。

「やがて、私たち全員がこの法外な渦巻きの中に巻きこまれることになった。そこでは、たいそう風変わりな棒切れや藁くずが、一時的に一緒くたにされているのだった」³⁴⁾と後に Virginia は回想している。

Bloomsbury の、特に第 1 章の頃の酸欠気味の集まりとは対照的なこの光輝あふれ、幻想的なサロンは、Bloomsbury の人々にかっこうな気晴しを提供したことであろう。そればかりではない。彼らは、自分たちがそこで見聞きしたくさぐさを仲間だけになったとき、ジョークの種にしたり、作品の中で戯画化するというような恩知らずのこともやってのけたのであった。

たとえば、Oxford 郊外の Garshinton にある Ottoline の家に招かれ、週末を過ごしていたときのこと、客のもとに、ただちに家に戻るようにとの電報が届いた。彼はたのしい滞在が中断されることに立腹し、Morrell 夫人にもさんざん不平を鳴らしながら暇を告げたが、じつは、これは先刻、彼自ら退屈のあまりに村の郵便局に出かけていって自分宛に打った電報であった。

ともあれ、Ottoline Morrell のサロンが Bloomsbury の仲間に、彼らのあずかりしらぬ社会のさまざまな現実と直面させ、彼らの視野を広げると同時に、知的虚栄心をくすぐる息抜きを提供したことは否定できない事実である。

〈Roger Fry と Bloomsbury〉

つとに雑誌掲載の Roger Fry の「美学に関するエッセイ」を読んでいたく感銘を受けていた Clive Bell は偶然のことから 1910 年に Fry と知り合い、彼を Bloomsbury の仲間にひきいれた。それまで Bloomsbury のしたことといえば、仲間同士議論したことだけであった（もつとも、作家であれば、新聞・雑誌の書評欄に寄稿したり、のちの傑作の草稿を練ったりし、画家であれば、多くの習作を描きためてはいたが）。D. H. Lawrence の言葉を借りるならば、「体内に人間的親切というミルクが一滴も流れていない」³⁵⁾ Lytton Strachey をはじめとする Bloomsbury の連中ときたら、「気の利いたことを言ったり、小利口ぶるのに忙しく、

「ただひっきりなしにお喋りしている。しかも、よいことや現実的なことはひとことだつて口にしない。それぞれが堅くてチツポケな殻に閉じこもっていて、そこから言葉を発して」³⁵⁾ いただけということになる。

Bloomsbury のメンバーになったとき、仲間よりもひとまわり年長だった Roger Fry は、すでにアメリカの Metropolitan Museum の絵画部門の主事の経験も積んでいたし、美術評論家として世に名を知られてもいた。彼は折しも壮大な計画を練っていたので、Bloomsbury の仲間もたちまち彼の情熱に巻きこまれることになった。

フランスの前衛絵画の魅力に開眼した Fry は英国の人々にそれを紹介しようと思いついたのであった。1910年11月8日から翌年の1月5日まで、第1回展示会が「マネと後期印象派展」と題して、London の Grafton Gallery で開催された。展示物は Cézanne、Gauguin、Gogh、Matisse、Picasso 等で、Manet の「フォーリー・ベルジュールの酒場」が呼び物であった。「これらの画家は、^{フォーム}form(形態)を模倣するのではなく、フォームを創りだそうとする者たちである。人生を模倣するのではなく、人生の等価物を見いだそうとしている…実際、彼らが目標としているのは illusion (幻想) ではなく reality (実相) である」と Fry はカタログに解説している。

だが、会場を訪れた人々の反応は凄まじいものであった。寛大なものは笑いだし、そうでないものは激怒した。子供騙しのペテン、猥褻等々と毒づき、事務長をつとめた Desmond MacCarthy に入場料の払い戻しを求める者さえ出た。「芸術における新しいものは不道德な行為と同種の怒りをかきたてがちである」と MacCarthy は述懐している。

だが、酷評にもかかわらず絵はよく売れた。この事実は、ひとが画期的なことにぶつかったとき、まずいかに本能的に反応するか、また、新たな感受性をわがものとするには、いかに時間がかかるかということを物語っている。いずれにせよ、Roger の信念はいささかも揺るがず、彼は第2回後期印象派展を1912年10月から12月まで同画廊で開いた。

Bloomsbury の仲間、とくに Paris 遊学の経験をもつ Clive Bell と Duncan Grant、それに Vanessa Bell は、これらフランスの前衛画家たちの意図を正しくとらえたが、他のメンバーたちも、そこに自分たちが手探りしていた表現方法の見事な例を見る思いがしていた。それは人間性把握の画期的な方向転換であった。

Fryによれば、ひとは物事を見るとき、本能的に反応するか、実利的な目的や道徳的判断と関連づける。ところが、このごく皮相的、通俗的な知識の下にある実相には全く無知であるため、芸術家があるものを無私無欲の心で眺め、それを彼の心眼に映じたままに再生してみせると、ひとは異を唱え、侮辱された、と言ったりする。だが、芸術とは、「外界のなにものにも限定されぬし、また価値づけられることもない芸術に個有の経験」なのである。芸術家にとって問題は、彼が日常生活と断絶したところでもつ独特の知覚力で把えたヴィジョンを作品という凝集し独立した完結体の中に伝えることであり、感情をフォームによって表現することなのである。そのために、彼は自然の形態要素を解き放って造型的に配置しなおすのである。このような創造的なヴィジョンにあつては、現実の対象物そのものの姿は消失し、独立した統一性は失われ、数多くの小片に分解し、それらが寄木細工のように集まって、モザイク様の全体像を形成する。こうした状態になると、芸術の素材は偶然的意味しかもたなくなる。人物の頭はカボチャほどの意味しかもたない。あるいはむしろ、カボチャでもいいし、人間の頭でもいい、芸術家にとりついて彼のヴィジョンを結晶せしめる造型的リズムによって決まるということになろう。この過程、つまり、ひとつの「精神的全体」の中に素材である像を具象化していく過程を Fry は‘transformation’（「変容」）と名づけた³⁶。

彼はまた、ある瞬間あるものに付着する不思議な意味について、「ひとが部屋の空間に位置を占めるその位置の定め方に、ある瞬間特別の意味が宿る」と表現している。Virginia Woolf もまた、そうした一瞬の訪れを次のように描写している――

とちょうどこのとき、London ではよく起こることだが、交通が一時パツリと途絶えてしまった。通りをやってくる者はなく、ひとり通らない。通りのはずれにあるプラタナスの木から一枚の葉がつと離れると、交通の途絶えた静寂の中へと落ちていった。それはどことなくなにかの合図が舞い落ちてきたというようであった――人々が今まで見落としていた事物に潜むある力に注意を促す合図が。それはまた、一条の川に注意を促すようでもあった――目には見えぬが、すぐ傍を流れ、角を曲がり、なおも流れつづけながら、

ちょうど、Oxbridge の川がボートに乗った学生と枯葉を呑みこんだときのように、人々を呑みこみ、渦の中に巻きこんでは流れていく一条の川のあることに。さて、この流れにのって今エナメルブーツをはいた少女が通りの向こう側からこちら側へと対角線に横切ってくる。すると今度はえび茶のオーバーを着た青年がやってくる。さらに一台のタクシーも近づいてくる。そしてこの流れの力がこの三者を私の窓下で一緒にした——タクシーが停まり、少女と青年が立ちどまると、揃ってタクシーに乗りこんだのである。それから車は同じ流れによってどこかへサッと押し流されていくかのように、音もなく走り出した。

この光景はごくありふれたものではあったが、ただいつもと勝手が違っていたのは、この光景を見たときから、私の想像することによりズミカルな秩序が伴うようになったことである³⁷⁾。

Woolf の描くシーンが視覚的感興を呼びさますのは上の例に限らない。実際、Vanessa は妹 Virginia の書物のページから躍りでてくるイメージを絵にしたいという誘惑にかられることがよくあった。

Roger Fry はまた、芸術家における無意識の領域にも早くから着眼していた。芸術家の感情、理解、事物に対する直覚は意識に基づいていると同時に、潜在意識にも根ざしている。ひとは自己の中から人間を抽き出すのだが、それは、ちょうど、深層心理の深みにバケツを降ろして、日常手の届かぬものを汲みあげるのに似ている。作家はこれに日常的経験をないまぜて、その混合物の中から作品を創造する。創作の過程が終わったあと、つまり、絵画であれ、交響曲であれ、抒情詩であれ、小説であれ、それができあがったときには、一体どのようにしてその作品ができあがったのか自ら顧みて訝るのは常である。Virginia Woolf の作品はとくに「潜在意識」の知的分析を特色としているが、これは、Wordsworth の「静かなるところにて思いおこされたる情緒」を現代的フォームの中に描いてみせたといつてよい。

Bloomsbury が彼らの手本としたのは、the Appollonia、Piero della Francesca、Turner、Gogh、Gauguin などであったが、「建築学的堅固さ、自然の入念な秩序づけと再構成の指針」として、Cézanne は別格であった。これと対照的な、たとえば、文学的主題に基く絵画や感傷的な

Raphael や Correggio の作品などは、19 世紀特有の罪——つまり、すべてに道徳的感情をまじえる混乱した感傷性——として斥けられた。

けれども、Bloomsbury の画家たちは、実作にあたっては、'formalist' としての立場をフランスの画家たちほどに極端に押しすすめることはしなかった。彼らは抽象画は殆んど描かず、肖像画や静物画を多くものしたし、小説家もまた、伝記的作品を数多く著わした。彼らは art と life のいずれもとこぼすまいとしたのである。人生や世界に対して常に理想的なバランスを模索し、妥協をよしとする英国的姿勢というべきか。

換言すれば、Bloomsbury がフランスの前衛芸術家たちから衝撃を受けたのは、かれらの大胆で自由奔放な主題への関わりかた・解釈のしかたにおいてであった。Lytton Strachey は彼の感慨をこう表現している

文学におけるルールはことごとく…永久に粉碎されてしまった…
確実に立証されたことは…表現の「フォーム」は結局、伝統による
のではなく、ひとえに表現されるものそれ自体によるということ
だ³⁸⁾。

つぎの Virginia Woolf の手紙もまた、書物に秩序を与えるものとして彼女がいかに「フォーム」を重視したかを伝えている——

私は Ramsay 氏の中に父の正確な肖像画を描きこむつもりは毛頭ありませんでした…書物があのようにしたのであって、彼の肖像は、私が筆を進めるうちに、それに合うように変容したのでした³⁹⁾。

彼女はモダニズム文学のマニフェストともいえるべきエッセイ "Modern Fiction" の中で「1910 年、あるいはその頃に人間性は一変した」と記しているが、実際、ある批評家の言うように、「後期印象派の絵画に対する反応は、いかなる芸術家にとってもモダニズムのリトマス試験紙となった」のであった。W.B. Yeats も、これを 'the Art-quake of 1910' と呼んでいる。

これ以後、英国の美術は、未来派、渦巻派、立体派等々、さまざまな美術理論や動向に関係するようになる。Roger Fry は「Ruskin 以来、審

美眼に他の追随を許さぬほどの影響力をもつ人」⁴⁰⁾となり、modern art のスポークスマンとなった。

Bloomsbury との関連でいえば、それを契機として世間をむこうにまわすことになった展覧会によって仲間の同族意識がたかまり、話題の中心が文学から美術へと移ることになった。また、フランスの Picasso や Derain などとの交友を通じ、彼らの視野は海の彼方の動向にまで及ぶこととなった。彼らはそろって Francophile となり、のちに Lytton は *Landmarks in French Literature* (『フランス道しるべ』) を著わし、Virginia も Proust に傾倒することになる。

Roger Fry の芸術の効用についての信念とはつぎのようなものであった——G.E. Moore の主張したように、「美の享受」を通して養われる 'good taste' (「よき趣味」) ないしは 'sense of values' (「価値の感覚」)こそは、人間性を高めるのに最もふさわしい。愛情や友情というような人間関係も reality を垣間みせてくれるが、愛の翼は急速にすりきれるものであるので、愛に比べて、時間空間の緊迫性や偶然性が少ないうえに、排他的でなく持続的な途である芸術に頼るのがよいと思われる。芸術もまたコミュニケーションのひとつの方法なのであるから。「日常生活には無数の明暗や倍音がある。芸術家がそれを人々の意識にもたらすことがなければ、人々はそれを知らずじまいであろう。感受性によるこのような正しい感得は文化人の特徴のひとつであり、豊かな学識と論理的な精神を補うものである」⁴¹⁾。

Clive Bell も芸術に宗教に代る機能を期待している——「今なお、世界を表面上無宗教にしているのは…宗教がドグマで動けなくなっているからである。ところで、いかなる宗教も、からみつきまといつくドグマという雑草から逃れられないとして、ただひとつ、かなり容易に、構えることなくそれを振りすてる宗教がある。芸術がそれである…それは超経験的情緒の最も完全な表現を求めためばかりでなく、生きるためのインスピレーションを得るためにもある」⁴²⁾。

芸術こそは文明のインデックスであるのみならず、文明化の働きそのものであるという考え方が Bloomsbury の中に浸透し、芸術作品の創造と鑑賞が Bloomsbury の宗教となった。

以上みてきたように、Bloomsbury 美学の核心は、「経験的」といえる。芸術家の創造をたすけ、世の人々の芸術鑑賞をたすけるための美学であった。芸術作品を仔細に吟味し、それにたいする個人の感応を検証し、解明しようとする、そのことにつきた。実際、Roger Fry はしばしば大衆を前にして、Bernard Shaw がそれだけでも聴く価値があるといったあの声で、「最も鋭敏で生き生きした感応を以て、芸術作品を鑑賞する方法」を説いた。

以上見てきたように、グループとしての Bloomsbury を可能にしたのは、G. E. Moore の哲学と Roger Fry の美学であった。Moore の「人間の交わり」の提唱は、友情と卒直な会話の価値に対する彼らの信念を強めてくれたし、「美の享受」は Bloomsbury の美学に哲学的基礎を与えてくれた。Fry はそれをさらに発展させて、「フォームの思考は重要な精神的訓練になる」との信念にたつて、芸術の制作と鑑賞を奨励した。また、彼のうちだした芸術の統一原理は、それまで異なる芸術分野で精励していた人々を同盟者の気分で結びつけ、Bloomsbury にグループとしてのまとまりを与えることとなった。

ついに彼 (Roger Fry) は…ほんとうの世の中が実現するときが到来しつつあると感ずるようになった。そこでは、人はみな適度の財産があり、真実と卒直な会話という昔ながらの Cambridge の理想に基く社会であつて、しかも昔の Cambridge とは違って、芸術の重要性に目覚めた社会である。英国の若い芸術家は無教養で、自己中心的になる傾向があり、そのために彼らの作品は惨めに損われ、快い文明の中に共に思想を語り合い、芸術家がその一員として受け入れられる社会のことを忘れていた⁴³⁾。

Maxbeerbohm は、自分が若い頃にこのグループに加わらなかつたことに遺憾の意を表している。彼の描いた Roger Fry の見事なカリカチュアには、「Bloomsbury の法制定者にして第一の王」という題が付されている。

こうして Bloomsbury は、Moore の閉塞的な少数エリート派の哲学の

弱点を超克し、より成熟した現実的認識をわがものとし、それを実践に移す者たちの集まりとなった。

Leonard Woolf はのちに、Moore の推論の方法、理想主義が皮相なものであったことを認め、次のように記しているが、これには、それを超克しえた者の自信の響きがある——

(我々のこの態度は)行為、伝統の叡智、習性の束縛といった外的世界を全く無視していた。そして、先人達が伝統の叡智に依ってやっと築きあげた文明という毀れ易い薄い外皮の底に、情動や本能が蠢動しているという事実を忘れはてていた…しかも、我々の理性崇拜は、ちょうど他の宗教が祈禱の靈験を信ずるように、理性の効験を信じていたのであった…さらにもっと悲惨なことには、人間性とは相反する合理性を人間性に属すると往々にして錯覚していたのであった。この疑似非理性主義のために、我々の思想も感情も浅薄で、皮相にならざるをえなかった⁴⁴⁾。

Bloomsbury はいまや人生が不条理に充ち充ちており、社会の大多数の者は、自らの判断を正しくなし得るだけの知恵と経験と自制とを必ずしももち合わせていないことを承知していた。なるほど、彼らは自らの直感が発見したことを受け入れる前にひとたび知的審査にかけはしたが、その最終的に目指すところは直感と理性の統合であった。今後かれらが志向し、ついに Bloomsbury の一大特色となるのは、彼らの弁証法、つまり、相反するものの止揚を志す思考法である。かつて E.M.Forster を感嘆させた Cambridge の雰囲気—つまり、肉体と精神、理性と感情、人生と芸術の渾然一体となった世界を、彼らは今度は実社会においても作品の上でも実現させようとしていた。Lytton は歴史と文学の見事に融合した伝記を書いて、伝記文学を芸術の高みにひきあげたし、Virginia Woolf は、現実と幻想、つまり、彼女のいう「花崗岩と虹」を統合させて絶妙な散文詩ともいふべき小説の数々を書いた。画家たちが art と life の理想的接点を求めたことは前に記したとおりである。

〈Bloomsbury の功績と今日的意味〉

Bloomsbury が何よりも知的検証を尊んだことは再三述べてきたが、彼らとその最も強い光で照らしたしたのは、彼らが生い育った Victoria 朝の家父長制であった。「家父長中心の家族制度は、家父長制国家の最小の単位にすぎない。軍隊や宗教の制度、身分相続制と大英帝国主義体制—これらはすべて、つまるところ権力と服従の伝統に基く当然の権利と義務の観念に依存している」⁴⁵⁾。

Virginia の父 Leslie Stephen は英国でいち早く不可知論者を宜し、また、すでに名声が確立していた作家たちの再評価をすすんで行なったが、家長としての特権の座を投げうつことはしなかった。Bloomsbury は、「理性の眠りは、暴力という怪物をうみだす」という強い信念の下に、これを人間の営みの全領域にあてはめて考えなおす勇気があった。そして、既存の権威の大半が、なにか外なる力に依るものであり、それゆえ滑稽な観を呈していると認めざるを得なかった。顕官の衣装、肩書、勲章、褒状、これらは見通し難い壁で人を囲み、おうおうにして権威を人格として通用させる幣を生むと考えた。Virginia Woolf はのちに、『ウィティカー年鑑』の中の席次表にしても、それが価値の最終的順序を表わしているとは信じられないとして、「たしかに価値を測るということは暇つぶしとしては面白いかもしれないが、あらゆる仕事の中で最も虚しいことであり、また、価値測定師たちの判決に唯々諾々として従うことは最も卑劣な態度である」⁴⁶⁾と書いた。

また、Bloomsbury は不誠実とごまかしと隠蔽からなる Victoria 朝の礼儀作法やお上品ぶりが不必要に男女両性をひき離し、ひとを孤立させて、真の愛情や友情を不可能にしたと考えた。男性に比べはるかに多くの性のタブーに取りかこまれていた Virginia Woolf が両性具有論を展開したのも、彼女が実際 Bloomsbury の中で男女対等な人格の交わりを経験し、そこから各々が大きく成長し、自らの芸術や思索を成熟させていく姿を目撃したからであろう。

「ひとに対して権威をひけらかす振舞いのでる者は、からかってくれといっているようなものだ」⁴⁷⁾と彼女の弟 Adrian は書いている。Bloomsbury はひとに備わる魅力にも敏感だったが、罪のない弱点にも容赦なく

反応した。皮肉めいた姿勢は彼らに共通するものであったが、自らの弱点にたいしても同じ姿勢で臨んだところに救いがあったといえる。

およそ礼を失するなど想像しにくい T.S. Eliot ですらも気の毒にも、Virginia と彼女の義兄のお気に入りのジョークの種にされた。「この混合物——十分に研究し尽くされた取りすましたマナーや話し方と結びついた第一級の才能——これは僕の眼にはたまらなくコミカルに映りました」と Clive Bell が記せば、Virginia が彼に宛てて、「日曜日ニチヨビの昼食チウシキにいらっしゃいな。Tom がやってくるのですから。そのうえ、四ツ揃ヨツソロえのスーツを着こんでね」⁴⁸⁾と書くという具合である。

第一次大戦という未曾有の国家的出来事に直面したときにも、Bloomsbury はこれを「権利と義務」という観念の上にあぐらをかいた「力と服従」の伝統の延長線上にあるものとしてとらえた。彼らは戦争を、「怖しく不必要で、根本的に滑稽なもの、つまり、何についての戦争でもなく、誰のためにもなる筈もない戦争だと考えていた。名誉や勇気や愛国心について語ることは、子供がもうひとりの子供にむかって、もしやれるものなら往來の激しい通りを、さあ突っぱしって横ぎってみろ、とののしているのと大差ないと見ていた」⁴⁹⁾。そして、仲間の誰もが平和的交渉による一刻も早い終結を望んでいた。

1916年1月、徴兵制が実施されると、彼らはそろって良心的徴兵忌避の免除を願っていた。

Lytton は Hampstead Advisory Committee (ハムステッド諮問委員会) の前で、国際論争を武力によって決着をつけようとするやり方は邪悪きわまりないという主旨の声明文を読みあげたが、これは取りあげられなかった。ついで彼は、8人の裁判官からなる法廷に呼びだされたが、まず友人からエア・クッションを受けると、やおろそれをふくらましてから木のベンチに置き、腰を下ろして旅行用毛布を膝一杯にまきつけ、さて審問に応ずる気配を見せた。ひとりが、「あなたはすべての戦争に反対なのですね」と尋ねると、相手を揶揄するときの彼独特の痞高い声で、「いえ、減相もない、この戦争に限ってです」と答えた。「では、Strachey さん」と裁判官は^{きょうだい}とおきの質問に移った、「もしもですよ、ドイツ兵があなたのご姉妹をレイプしようとしているところを見かけたら、あなたはどうかしますかな?」。すると彼は傍聴席に坐っている2人の姉妹に視線を投げてから、「そう、僕は両者の間に割って入ろうとするでしょ

うね」と答えた。同性愛者のこのユーモアを裁判官は解さず、結局、彼は方々の医者に頼みこんで作成してもらった診断書によって徴兵免除されたのだった。とはいえ、診断書の必要のないことは、彼の体格を見る者の眼には歴然としていたが。

大蔵省勤務の Maynard Keynes の場合は、「自分でも蔑んでいる政府の下で、犯罪的目的のために働く」ことを後ろめたく思い、また、仲間の非難にもさらされていたが、対独条約のごまかしを看破して退陣し、後年 *Economical Consequences of Peace* (『平和の経済的帰結』) を著わして、パリ講和条約における Clemenceau, Wilson, Lloyd George の失策を分析し、公けにすることでこれを償った。

Leonard Woolf もまた、戦争勃発の1ヶ月後、戦争防止には権威ある国際機関が必要であると信じて、のちに実現される国際連盟の原案を練っていた。

このように Bloomsbury の仲間は戦時下、ひたすら自己防衛路線をとり、ペンや絵筆によって人間の愚かさと秘かに戦っていたのであった。作家も画家も異常なまでの集中力で各々の仕事にうちこんでいた。Roger Fry が、新しい美を人々の日常生活にもたらそうと Omega Workshop (「オメガ工房」) をおこし、Woolf 夫妻が文明を広める目的で Hogarth Press (「ホガース出版社」) をおこしたのもこの戦時下であった。

戦いは、名誉に関することで、理性に関することではなかった。社会体制や国家的出来事も、もとを辿れば、国民ひとりひとりの価値観と感受性から発しており、人々が狂気にとらわれている間は聴く耳をもたぬことをよくよく承知していたからである。Bloomsbury の仲間たちは、革命的目的を平和的手段によって成し遂げようとしていたのであった。

Bloomsbury の特徴は、先に少し触れておいたが、ふたつの相反する原則の統合を志向する弁証法的思考法にあるといえる。つまり、どちらか一方を切り棄てるのではなく、両者を止揚する途を模索したのであった。彼らの理性がつねに繊細な感受性と美への愛によって深められ、彼らの友情が批評や揶揄と手をたずさえていたのもそのあらわれである。また、芸術における無意識下の領域や不条理の重要性にいち早く注目したのも、両性具有の理想境を憧憬したのも、同じ性向に因るものであった。

「Bloomsbury では、異性愛者の女性が、同性愛者の男性と暮している」⁵⁰⁾ という Denis Healey の言葉はおおかたあたっているし、そのカップルのことごとくが三角関係や四角関係の中に暮していた、というのも否定できないが、これは彼らの考え方からして当然の帰結であった。Bloomsbury では、男性、女性というふたつの性は、人間のさまざまなタイプのうちの偶々ふたつにすぎないと考えられていたので、いかなる組合せのヴァリエーションも不自然とは思われなかったからである。ただ、それにもまして重要なことは、彼らがそうした状況の中で、誰かを恨んだり、運命を呪ったりすることなく、当事者全員が納得し、実り多き人生を送っていたという事実である。

たとえば、Bell 夫妻と Roger の場合—— Vanessa の愛が Roger に移ったことを知った夫の Clive は最初のうちこそジェラシーを覚えたものの、「そうした苦境や葛藤と四ツに組むには教養がありすぎたし、同時に、共通のよろこび——息子たちの成長や、Roger が師である芸術の世界など——を共有していた」⁵¹⁾。後日談になるが、Bell 夫妻はやがて彼らの結婚生活を‘a union of friendship’（「友情の結びつき」）へと解消した。Vanessa の愛はさらに Roger から Duncan へと移り、一方、Clive はさる夫人との恋を堪能し、Roger も別の恋人を得て、それぞれに残された友情を享受しながら、自らの仕事にうちこんだ。Vanessa と Duncan はその後の約 40 年間で深い相互理解のうちに共に住んで制作に励んだ。その Duncan の絵の解説にこれつとめ、著作を通じて彼の名を世に広める手助けをしたのは Roger であった。

Lytton、Maynard、Duncan の場合は、同性間、異性間を問わず、人間関係のひとつの理想的なあり方を示唆してくれる——Maynard の愛情が自分から Duncan に移ったことを知った Lytton は当然懊悩したが、「Maynard とは余り長い間友人だったので、いまさらそれをやめるのは、無理というものであった」。一方、「ともに理性的で視覚的情緒に鋭敏な」Maynard と Duncan は、「Lytton との場合とちがって、所有欲に悩まされることなく、互いを受け入れることができた……Lytton の人生が依存と混乱の連続であったのにひきかえ、ふたりは人間関係にはるかに敏感で、部屋を共にしながらも、別々に暮し仕事に専念する術を心得ていた。ふたりは私的生活を調和させる方法を本能的に知っていたのである」⁵²⁾。ふたりの友情（愛情？）は、Maynard が結婚し、Duncan が

Vanessa と暮すようになってからもいささかも変わらず、終生つづいた。一方、Lytton はどうかといえば、画家の Dora Carrington と出遭い、死の日まで同棲生活を送った。彼女は sex よりも男を操縦しているという感覚が好きな女性で、Lytton はここに安住の地を見出し、彼女の庇護に包まれて執筆に専念できるようになった。ふたりは外でてんでに恋をしていたが、心の中心に据えられていたのは、いつも互いであった。それぞれの恋について自由に、同情をこめて話し合うことができたのも、この変則的な結びつき故にであった。Lytton が世を去ると、その数ヶ月後 Dora は自ら命を断った。David Gadd はふたりの関係を「一個の芸術作品」と称え、「それには芸術家の力量と intelligence と情緒的洞察力のすべてが必要であった」と記している⁵³⁾。

彼らに共通しているのは、人生はできごとと出遭いにみちており、ひとの心は移りゆくものだという認識であった。流動する時間と人間性のさなかにあつて、彼らは真実から目をそらさず、相手と自らの変容をいさぎよしとした。それを支えていたのは、彼らの理性尊重の姿勢であつたろう。理性は寛容の精神につながる。理性は、自分の信じていることが必ずしも正しいとは限らず、自分の好きなことが必ずしも良いものとは限らぬことを教えてくれる。検閲なしの受情と、感受性豊かな理解が彼らの絆の特徴であった。

さらに彼らの場合、皆が皆、人間味溢れる強烈な個性と、並々ならぬ天分の持主たちであった。彼らはそれをしかと見据え、それに魅了されつくしていたので、あとの現象が彼らの友情や愛情を根底から揺るがすことはなかった。たとえば、Roger Fry は Clive Bell によれば、「騙され易い戦士」で、終生さまざまな計画を夢想しつづけた人間であり、友人の真の動機を誤って理解しつづけたにもかかわらず、自分では人を理解する力があるとうぬぼれている人間であったが、Clive 自ら、たちまち Roger の芸術的熱意に感染し、彼の美学を理論化し本に著わすことに全力を尽くした。「近親相姦のような友情は、熱烈な愛情よりも長つづきする」という Margaret Drabble の言葉は、まるで彼らのためにあるようである。「私は友人たちを馬車のランプとして使う、あなたがたの明かりで…別の野原が見えてくる一向こうに丘がある、私の景色がひろがる」⁵⁴⁾ というのが Virginia の感慨であった。

Bloomsbury は第一次大戦後、突如として有名になった。それは Lytton Strachey の *Eminent Victorians* (1918) を皮切りに訪れた。

戦争を通じ人々は、英雄的行為がむしろ匿名の人々の手になるものであり、個人的な出来事であるべき苦しみや死すらもが大衆化してしまったことに気づき、懐疑的になっていた。そうした幻滅のムードの中で人々は、「英雄につきまとう悪を避けるためなら、英雄につきまとう美德をも犠牲にしよう」⁵⁵⁾ と心に決め、理性的で平和で自由な生活を貫き通した Bloomsbury の人々の言うことに耳を傾ける心の用意ができていた。これまで英雄視されつづけてきた Victoria 朝の名士たちを本来の大きさに戻してみせた Lytton Strachey の本は、まさに時宣を得ていたのである。1922 年、Virginia Woolf は、「Gordon Square の全員が有名になりました。内心ではまだ若くて、傲慢で、とても鋭敏な一団という風に感じていますが、少々円熟いたしました」⁵⁶⁾ と友人に書き送っている。

だが、皮肉なことに、彼らの名声が絶頂期にあったその頃、グループとしての Bloomsbury は本来の自発性を失い、解体の途についていたのであった。「彼らは、絶頂期たるべきときに、時代錯誤に向かっていた」と 1930 年代のメンバーのひとり Gerald Brenan は述べて、こうつづけている—「だが、もしもコバルト爆弾がすべてを忘却の彼方へと追いやってしまわないなら、未来の人々はこれらの人々に興味を覚えることだろう。なぜなら、彼らは、世界がつねにかかわらずノスタルジアをもって振り返る何ものかを、つまり、^{アンシャン・レージュム}旧体制を体現しているのだから。彼らは、教養に裏うちされた洗練された生活と友情という芸術を非常に高みにまでひきあげた。また、彼らの作品はこの洗練された感じをよく反映している」⁵⁷⁾。

Brenan のアンシャン・レージュムという扱え方は、Hugh Cecil のそれと共通している。Desmond MacCarthy の孫で現在 Leeds 大学教授である Hugh は、「Bloomsbury を研究することによって、時代相が見えてくる」と前置きしてから、彼らのオリジナリティと時代との関係をつぎのように説明している—

彼らは非常に独創的な人々だったが、その頃の *upeer-middle-class* のある特定のタイプの社会に典型的な人々であった。そこで

は、ある程度の経済的余裕が保証されていて、たいそう快適な暮らしができた。これは、高度に教養があり洗練された生活であったが、その頃特有のものといってよい。なかには、とくに Keynes のように、きわめて裕福な者もいたが、たいていは、金持ではないとしても、経済的安定をもち合わせていた。利点ということからいえば、彼らは、社会の有利な側が非常な利にあずかっていた時代に、社会の妥当な側に属していた。例えば、彼らには召使いがいて、そのおかげで、興味深い人生を易々と送ることができた。精神を陶冶し、友情を培う生活ができた。最良の意味における有閑の人生であった⁵⁸⁾。

もうひとり、Brenan と同じ 30 年代を代表する作家 Stephen Spender もまた、同様の感慨をもらしている。彼は Bloomsbury の人々を、「昔 Florence に疫病が流行ったとき、田舎に引きこもって Boccaccio の物語を話し合った人々」になぞらえ、自分たちの世代はむしろ、Goethe の ‘Sturm und Drang’ (『疾風怒濤』) の世代に似通っていると記してから、「事件の渦中に巻きこまれ、圧迫されて、はじめのうちこそ熱狂的に反応したものの、やがて苦難と嫌悪を味わうようになった」⁵⁹⁾と告白している。

たしかに、Bloomsbury が Victoria 朝の道徳主義を嘲笑し、自らの創始になる価値観を自由奔放に実践に移すことができたのは、その背後に確固たる才芸、教養、趣味、伝統の自負があったからである。理性よりも血と肉に信をおき、直覚的教条的哲学をかかげた苦学独習の D.H. Lawrence が Bloomsbury になにか真面目さを欠いた感じ (‘amusement’) を嗅ぎつけたのは、上層中流階級の居間や Cambridge で培われた彼らの知的豁然趣味を理解できなかったからにほかならない。それは、偉大さとか、重苦しい人々とか、まじめくさったしかつめらしさというようなものに居心地の悪さを覚える者の斜にかまえた正統性とでもいうものであった。「Bloomsbury では、深遠な事柄は、それが同時に機知にとんでいないと、口にはされなかった」⁶⁰⁾と Nigel Nicolson は書いている。Times Literary Supplement のもと編集長 Alan Pryce-Jones は、‘amusing’ (‘興をそそられる’) という語には、1920 年代にあっては、知

性に関係した独特のニュアンスがあると述べ、Bloomsbury 精神を 1920 年代全般の精神と関連させている⁶¹⁾。

Raymond Mortimer は、Virginia Woolf と Lytton Strachey のふたりは、「けして大きすぎない声と、あくまで礼を失しない懷疑と、大衆に対してけして侮辱にならない無視」という点で共通していると言い、彼らは Victorians を笑殺するのに、「Victorian home で鍛えぬいた武器を用いた」⁶²⁾と記しているが、これは全く正しい。彼らは bohemians とはちがって、自分たちの知的貴族階級の内側にとどまったまゝ Victoria 朝に背いたのであった。実際、Bloomsbury の真価は、資質と環境の稀有な一致に由来するもので、今日では絶対に不可能であるからとさえいえるのである。Bloomsbury の審美家たちはさしずめ、Angus Wilson 言うところの今は絶滅した‘Such Darling Dodos’（「あのいとしきドードー鳥たち」）である。安定と繁栄の種族であるこれらの生き物たちに餌をやる余裕はこれ以上ない、というのが今日の一般の感想であろうが、彼らに対してノスタルジアと憧憬を禁じえないのもまた、事実であろう。

Bloomsbury は当時から今日まで、非常識で不道德、傲慢で、互いにほめ合う者たちであり、排他的な ‘intellectual snobs’（「知的俗物」）のグループであるというそりを受けてきた。つまり、反動的なもの、道徳的にいかがわしいものすべてと結びつけられてきたのである。

5 年前 Virginia Woolf の生誕 100 周年に際して、*The Times* に猛烈な攻撃文が載った。これは、当代のジャーナリストの中でも最も人々の尊敬を高め、人間味豊かで機知にとむという評判の Bernard Levin の手になる記事で、Bloomsbury というのは度しがたい bore（退屈な者）の一群であり、自分は今後 Bloomsbury の書いたもの、Bloomsbury について書かれたものは一行たりとも読まないし、最も卑劣な敵にすらも、これほど不愉快な試練には合わすまい、という主旨であった。そして、この広くいきわたった誤解を正そうとすればするほど、かえってそれを広める結果となり、ついには、「Bloomsbury 憎悪は国民的スポーツにまでなった」⁶³⁾であった。

たしかに、彼らが非常識だったことは認めねばなるまい。Vanessa はある晩餐会の席上、隣席の紳士に「あなたは政治に興味がおありですか?」と訊ねたが、彼は時の首相 Asquith その人であった! また、戦時

下、農作業に従事していた Duncan は、鶏卵をかえそうとオープンに入れたり、隣家のと区別するため、お手のものの絵具で鶏の尻尾を青く染めて村人たちを驚かせたことがあった。

彼らが排他的であったという非難——これも認めよう。ある批評家の言うように、Bloomsbury の口には出さぬ機能のひとつは、知性に不足のある者、無神経な者を排斥することであった。とうていそこでは栄えようのない者を、その困難な境遇から締めだしてやるのは親切というもの、というのが彼らの考え方であったが、これは同時に、ひとに説明するのを厭う彼らの本能にも根ざしていた。とはいえ、Lytton Strachey のように、「やあ、お久しぶりで。4年ぶり位ですか？」と通りで挨拶されて、「ええ、まことに結構な期間で」といいながら足もとめずに歩きつづけるというのは、たとえ、言葉による殺人という英国が誇ってきた伝統芸術を考慮に入れたとしても、余りほめられた話ではないし、また、Virginia Woolf のように、相手次第では、怒りと驚きの相半ばする眼を大きく見開いて、ニコリともせず、力の入らぬ握手をするというのも礼儀に叶っているとは言いがたい。

互いにほめ合う仲間という非難について言えば、これはあたっていない。たとえば、Virginia Woolf は Lytton の作品をかかわなかったし、Clive は Fry の審美眼を高く評価しなかった。だが、個人としてはそうであっても、世間から感情と思想の共同体とみなされても仕方がない面もあった。大抵の者が upper-middle-class の出身であり、学歴も似ていたし、互いに近隣に住んで変則的でウロンな生活を送っていた。交友と美的経験を生活の中心に据え、そろって左翼に属し、平和主義を奉じていた。それに、とくに 1920 年代には、彼らの作品が著しく印刷物や画廊のスペースを占めていた。Sunday Times のトップ批評家 Desmond MacCarthy や Nation の Leonard Woolf、あるいはふたりの著名な美術評論家 Roger Fry と Clive Bell が彼らの最もよく知る仲間の作品をとりあげて論評したとしても、それは自然の成りゆきというものであった。

‘snob’（「俗物」）という点では——なるほど、Lytton Strachey は爵位に対しては一時的にせよ人間の弱みをさらけ出すこともあったし、Virginia Woolf も、首相や Einstein の出席が約束されているロンドンの華やかなパーティの魅力には抗しきれぬ思いをしたことも事実だが、これとても人並みの snob の域を出るものではない。画家たちはどうかとい

えば、世俗的関心は全くなかったといつてよい。Duncan Grant に至つては、いつも友人からの借り着をきて、床にずりおちそうなダブダブのズボンを時々引っぱりあげていたし、職業柄お偉方との交際を日常とする Maynard Keynes が仲間の間で肩身を狭くしていたことは前に書いたとおりである。

排他性といい、傲慢さといい、これには絶対的基準などなく、相対的なものであるし、同じ人間が、自ら志向する知的基準や審美的基準、人間的高みに対してはこの上なく謙虚であるということも大いにありうるところである。

不道德との非難——これは、何を道徳的とみ、何を不道德とみるかによるので、各自の判断を尊重するしかあるまい。だが、さまざまな批判を招くというのも、このグループが無定形であるからと同時に、その存在の大きさを示すバロメーターなのではあるまいか。

ただひとつ、確かに言えることは、今日我々は、彼らが紹介の先導をつとめ、実践に移したさまざまなことを、そうとは知らずに当然のこととみなしているということである。我々は、今日、モダニズム芸術一般への感受性は涵養済みだし、法的手続きを厭うカップルや、同性愛などの変則的愛情にたいしても、さほど奇異な目を向けなくなっている（と思いたい）。フェミニズムにもさして抵抗感を覚えなくなっている（と思いたい）。国同士の紛争は、国際連合がその收拾にあたるものとあてにしている。換言すれば、我々は今日、さまざまな価値観の共存を許容する時代に生きている。「Bloomsbury は promiscuity（無差別な乱雑さ）に墮することなく、permissiveness（寛容さ）を創始した」と David Gadd は述べているが、実際、Bloomsbury は、人間関係をめぐる問題においても、芸術のとらえ方においても、少々時代に先んじていた。*The New Statesman and Nation* (10 December 1949) の week-end competition に採択されたつぎのユーモラスなエピグラムがこのことをよく示している——「ここ (= Bloomsbury) では、詩も、意見も、愛も自由だ。ああ、どうか私をとらわれの身にして下さい！」。

近年の Bloomsbury 再評価の動きや、ちょっとしたブームは上述の今日の状況とかかわっているのであろう。「時はより良き改革者」という Francis Bacon の言葉がここにも生きている思いがする。

ブームといえば、昨年 Tate Gallery が展示物を年代順に掛けかえた際

に、一室を‘Bloomsbury and Vorticism’にあてたこともひとつのあらわれである。そこでは今日、Duncan や Vanessa など Bloomsbury の仲間たちの絵と、Roger Fry にお粗末な喧嘩を売って、以来 Bloomsbury を敵対視しつづけた Wyndham Lewis ならびにその一派の絵が、広い展示室の壁で対峙している。

mass culture (大衆文化) の中で「個人」が危機に瀕し、「許容の時代」にかえて個性を樹立するのに困難を覚える今日、あくまでも個人でありながら「ひととの交わり」の中で個性を伸長させ、永続的価値をもつ数々の業績をのこした Bloomsbury の生き方を探ってみるのは、とくに意義があると思う。

これと関連して、つぎの Clive Bell の述懐は、個人主義と天才の、あるいは、一国の精神風土と天才の関係をうかがわせるものとして興味深い——美的感受性やユーモアにとむ者、社会的快適さを好む者、敏感な者たちが住むには楽しい国とはいえないが、(英国は)「あの見事なまでに徹底した個人主義、独立心を育成する。それは英国の一部の天才たちに歴史上で最も偉大な文学作品をうみださせ、現代では最も独創的で深遠で大胆な思想に磨きをかけることを可能にしている」⁶⁴⁾。

Bloomsbury の画家たちの作品が、彼らの間の文学作品や、思想や生き方と比べて生彩に欠けるのは、上記のことと関係があるのだろうか。

ともあれ、最後に Nigel Nicolson の言葉を紹介してしめくくりとする

今日我々が当然のこととみなしている社会的工夫は、まず最初 Bloomsbury によって試みられた。たとえば、恋愛を始めたり、それに終止符を打つ術だとか、たいして好きでもない友人の著書を、実質上は嘘をつかずに賞賛する術だとか、あるいは、三角関係を当事者のいずれにも苦痛を与えずに持続していく術などである。Bloomsbury は今なお我々にどう生きるべきか、どうしたら幸福になれるか、どのように我々の時間を割りふるべきかを教えてくれる…彼らならば、Kahlil Gibran のつぎの詩行を己がテーマと受けとめたことであろう——

愛し合うとも 契り合うなかれ
杯を満たし合おうとも 杯を同じくするなかれ
共にいようと 距てあれかし⁶⁵⁾

〈おわりに〉

Bloomsbury についてはわが国では殆んど知られていない。Q. Bell の *Bloomsbury* の翻訳書 (1972 年刊) および R. Deacon の *The Cambridge Apostles* の翻訳書 (1989 年刊)、それに中公新書に収められた案内書 (1989 年刊) がこれまでに出版された邦文文献のすべてである。

私は長年 Virginia Woolf に関心を寄せてきたが、彼女がその主要なメンバーであった Bloomsbury をぬきにして彼女の文学を研究しても片手落ちであるという焦慮はつるばかりであった。また、あくまでも個人主義に立ちながらひとつの理想的な交友のあり方を見せてくれたこのグループをわが国の人々に紹介したいという切なる気持もあった。ともすれば、頼りない情緒的な人間関係によりかかり、希薄な連帯感を共有することで個の問題をすりかえようとするわが国の精神風土を思えば、なおさらそうであった。V. Woolf は人間をふたつの範疇に分けて考えていた——すなわち、人生を高める者と、人生を小さくする者である。Bloomsbury の仲間たちの生き方を知ることでその人の人生の色合いがいささかなりとも変わり、その温度があがれば、との願いが私にはあった。

さいわいにして、私は昨年 1 年間に在外研究員として英国の地に過ごすことができたので、第一次資料に多く触れることができ、また、彼らを知っていた人々から直接話を聞く幸運にも恵まれた。本稿では主として Bloomsbury の人々の人生観や生き方、メンバー相互の影響関係に焦点をしばって全体像の紹介につとめた。これは私の本来の研究のいわば通過儀礼ともいうべきものであったので、今後やっと心安じて Bloomsbury という大きな森の、いずれも胸をときめかせるあれこれの小径を心のむくまゝに探索できるものとたのしみにしている。

- 1 Nigel Nicolson, "Bloomsbury: the Myth and the Reality" in Jane Marcus (ed), *Virginid Woolf and Bloomsbury* (London: MacMillan Press, 1987), p. 8.
- 2 Quentin Bell, *Bloomsbury* (London: Weidenfeld & Nicolson, 1968), p. 21.
- 3 Quentin Bell, *Virginia Stephen 1882-1912*, Vol. I of *Virginia Woolf A Biography* (London: Hogarth press, 1972), pp. 3-4.
- 4 George 'Dadie' Ryland, under the common title of "Bloomsbury—The Next Generation", Supplement of *The Independent*, October 1990, p. 44.
- 5 Richard Deacon, *The Cambridge Apostles A History of Cambridge University's élite intellectual secret society* (London: Robert Royce Ltd., 1985), p. 57
- 6 Virginia Woolf, "Leslie Stephen" in *Collected Essays* Vol. 4 (New York: Harcourt, Brace & World Inc., 1967), p. 79
- 7 Noel Annan, *Leslie Stephen His Thought and Character in Relation to His Time* (London: MacGibbon & Kee, 1951)
- 8 Virginia Woolf, as quoted in Aaron Rosenblatt, *Virginia Woolf For Beginners* (New York: Writers & Readers Publishing, Incorporated, 1987), p. 29
- 9 Richard Deacon, op cit., p. 5. 使徒後教父とは、12 使徒につづく正統的キリスト教教父のこと。
- 10 Michael Strait, *After Long Silence* (1983), as quoted in Richard Deacon, op cit., p. 38.
- 11 Sir Dennis Proctor, as quoted in Richard Deacon, op cit., p. 59.
- 12 Henry Sidgwick, as quoted in J. K. Johnstone, *The Bloomsbury Group A Study of E.M. Forster, Lytton Strachey, Virginia Woolf, and their Circle* (New York: Octavia Books, 1978), p. 8.
- 13 Henry Sidgwick, *A Memoir* ed. by A.S. and E.M. Sidgwick (London: MacMillan, 1906)
- 14 E.M. Forster, *Goldsworthy Lowes Dickinson* (London: Arnold, 1934), as quoted in J.K. Johnstone, op cit., p. 13.
- 15 *Letters of Sidney & Beatrice Webb* ed. Norman Mackenzie Vol. II
- 16 Richard Deacon, op cit., pp. 56-57
- 17 Memoir Club で読みあげられた "My Early Beliefs" と題するペーパー中の文章。
- 18 Clive Bell, *Old Friends* (London: Cassell Publishers Ltd., 1956), pp. 50-51.
- 19 George Moore, *Principia Ethica* (Cambridge: Cambridge Univ. Press, 1922), p. 189.
- 20 Maynard Keynes, *Two Memoirs* ed. with an introduction by David Garnett (London: Hart-Davis, 1949)
- 21 Hugh David, *The Fitzrovians A Portrait of Bohemian Society 1900-1955* (London: Hodder & stoughton Ltd., 1989), p. 78.
- 22 Frank Swinnerton, *The Georgian Literary Scene*, as quoted in Irma Rantavaara, *Virginia Woolf and Bloomsbury* (Helsinki: Folcroft Library Editions, 1953), p. 44.
- 23 George 'Dadie' Rylands, op cit., pp. 44

- 24 George Spaters & Ian Parsons. *A Marriage of True Minds An Intimate Portrait of Leonard and Virginia Woolf* (London : Jonathan Cape & The Hogarth Press, 1977), p. 37
- 25 Virginia Woolf, "Old Bloomsbury" in *Moments of Being Unpublished autobiographical writings of Virginia Woolf* (Sussex : The Sussex Univ. Press, 1976), p. 162.
- 26 *ibid.*, pp. 162-63.
- 27 *cf. ibid.*, pp. 165-66.
- 28 *ibid.*, 168.
- 29 *ibid.*, 172
- 30 *ibid.*, 173.
- 31 *ibid.*, 174.
- 32 J. K. Johnston, *op cit.*, p. 17.
- 33 Virginia Woolf, *Moments of Being*, p. 177.
- 34 *ibid.*, 177.
- 35 Frieda Lawrence voicing D. H. Lawrence's opinions, as quoted in Quentin Bell, *Bloomsbury*, p. 70.
- 36 この章の Roger Fry の美学については、彼の *Transformation, Vision and Design* を参考とした。
- 37 ヴァージニア・ウルフ著『私ひとりの部屋』(京都：松香堂、1984)の拙訳より引用した。p. 167.
- 38 Lytton Strachey, *Landmarks in French Literature* p. 127.
- 39 Virginia Woolf's letter to Jacques-Emile Blanche (1927), as quoted in *Charleston Newsletter* No 13, p. 7.
- 40 Lord Clark, in *The Bloomsbury The Word and Image* (London : The National Book League in association with the Hogarth Press, 1976), p. 36.
- 41 Roger Fry, *Vision and Design* (Oxford : Oxford Univ. Press, 1981), as quoted in J. K. Johnston, *op cit.*, p. 39.
- 42 Clive Bell, *Art* (London : Chatto & Windus, 1949), p. 277.
- 43 Virginia Woolf, *Roger Fry A Biography* (London : The Hogarth Press, 1940)
- 44 Leonard Woolf, *The Listener*, 9 June 1949, p.993.
- 45 Quentin Bell, *Bloomsbury*, p.37 Virginia Woolf, *A Room of One's Own* (London : The Hogarth press, 1978), pp.159-60.
- 47 Adrian Stephen, as quoted in Quentin Bell, *Bloomsbury*, p.78.
- 48 Clive Bell, *op cit.*, p.120.
- 49 Quentin Bell, *Bloomsbury*, p.69.
- 50 Denis Healey, "The Woolfs and Politics," in *The Charleston Magazine Charleston, Bloomsbury and the Arts*, September 1990
- 51 Leon Edel, *Bloomsbury A House of Lions* (New York : J.B. Lippincott Company, 1979), p.170.
- 52 *ibid.*, p.146.
- 53 *cf. David Gadd, The Loving Friends A Portrait of Bloomsbury* (London :

- The Hogarth Press, 1976), p.191
- 54 Quentin Bell, *Virginia Woolf*
 - 55 cf. Quentin Bell, *Bloomsbury*, pp.117-18.
 - 56 Virginia Woolf's letter to Jacques Raverat, as quoted in Leon Edel, op cit., p. 265.
 - 57 Gerald Brenan, as quoted in Gillian Naylor (ed.), *Bloomsbury The Artists, Authors, and Designers by Themselves* (The Octopus Group Ltd., 1990), p.272
 - 58 Hugh Cecil, in supplement of *The Independent*, October. 1990, p.47
 - 59 Stephen Spender, *World Within World the autobiography of Stephen Spender* (California : Univ. of California Press, 1966), p.159.
 - 60 Nigel Nicolson, in Jane Marcus (ed.), op cit., p.12.
 - 61 Alan Pryce-Jone, *The Listener* 45 No. 1148 March 1951. pp.345-46.
 - 62 cf. Raymond Mortimer, *Duncan Grant* (Penguin Modern Painters, Penguin Books, 1948)
 - 63 Nigel Nicolson, in Jane Marcus (ed.), *Virginia Woolf and Bloomsbury*, pp.7-8.
 - 64 Clive Bell, *Civilization*, as quoted in Rantavaara, op cit., p.49.
 - 65 Nigel Nicolson, in Jane Marcus (ed.), op cit., p.11 & p.19.詩集『予諸』より。
なお、日本語訳を秋山徹夫氏にお願いした。

(拙稿は、平成元年度跡見学園留学助成費による研究に基づいている)